平成27年度　嬉野市教育委員会　活動状況評価シート

教育委員会の活動状況

平成２７年度の具体的活動		教育委員会における自己評価				
		評価	項　　目	項目ごと実績･成果･評価	課題･問題点	改善点
具体的施策	(1)学校と教育委員会との協働意識の高揚と課題の共有化		・「教育委員と教職員と語る会」（トーク会）で、教職員との意見交換を実施し、教育現場の声を反映した教育行政の推進を図る。 ・「教育委員と教職員と語る会」（トーク会）のより一層の充実を図るため、「トーク会」終了後、教育委員による評価を行い、その結果を総括して、実施校の校長に伝えて、活性化に反映させる。 ・ＰＴＡ役員等との意見交換会を開催し、地域住民の声を反映した教育行政の推進を図る。	・本年度の「トーク会」は、年間５校の実施を計画し予定どおり終了した。本会では各学校の抱える教育課題について、出席者の方々から意見を出して頂く協議会を行い、今後の取り組みの方策や方向性を決めることができた。本協議会の出席者は、学校運営協議会会長、ＰＴＡ会長及び母親部長、民生児童委員、社会体育指導者、地域コミュニティ会長などの方々である。 ・「トーク会」の終了時には、教育委員一人一人が「指導と講評」という視点に立ってコメントを述べた。また、「トーク会評価表」の評価項目による評価を行った。	・「トーク会」実施のための事前打合せとシナリオ作りを担う教頭のマネジメントに十分な時間をかけて、「トーク会」当日の協議会がスムーズに進行するとともに、充実させるかが課題である。 ・各教育委員が行った「トーク会評価」を、どの様な方法で利活用していくかさらに研修する必要がある。	・限られた時間での「トーク会」の実施にあたって、成果を得るために、前回及び他校のシナリオについて十分な説明を行い、参考にさせる。また、前訪問校の「トーク会」を参観するなどの方法を講じる。 ・「トーク会」の評価の教職員の評価を、管理職に公表して活性化を図りたい。
	(2)市長部局と教育委員会との関係		・学校訪問時の「教育委員と教職員と語る会」（トーク会）で、市長部局の部長・課長等の出席を求め、教育現場の声や市民等の意見を市の行政に反映させる。	・「トーク会」での協議題が、「家庭や地域との連携」をテーマにした内容の学校が２校で、残り２校は、「学力向上」「小中一貫教育」「集団づくり」の内容であった。前段の「地域との連携」の学校では、学校評議員・地域コミュニティ・学校運営協議会委員・ＰＴＡ役員等の出席を依頼し、熟議により行った。また、後段の「学力向上」では、教育事務所の指導主事に出席を依頼した。	「トーク会」では、協議題により合致した指導助言者の選定と招聘が課題である。特に、依頼者の選択は事前に十分、学校教育課題等を考慮して行うことが必要であり、課題である。尚、「トーク会」での協議会では、教育委員としての立場で意見を述べることが課題である。	・当教育委員会で対応できない分野の課題や協議題については、関係部局や教育事務所並びに県教委等の行政力の活用を図りたい。 ・定例教育委員会等の場において、委員全体の意見を集約したい。
	(3)定例教育委員会会議の公開性の拡大と深化をはかる		・市長部局の副課長・主任及び小中学校長・教頭、ＰＴＡ役員、学校運営協議会委員・管理職事務長、主幹教諭・指導教諭等の輪番制の傍聴を拡大する。尚、市役所総務課から傍聴を必置とする。 ・定例教育委員会会議終了後に、傍聴者からの感想意見を求める。	・定例教育委員会の傍聴制を導入して８年目の今年は、校長・教頭、事務長の傍聴が定着し、また、市長部局での副課長、主任に加えて、学校評議員、学校運営協議会委員への傍聴の枠を拡大した。さらに、当委員会終了後、傍聴者から感想等を述べてもらう時間を設定して、疑問点については即刻回答した。さらにまた、移動定例教育委員会は１回（嬉野中学校）で実施した。 ・このように傍聴者の枠を拡大したり、感想や疑問点についての発言できる場を設定することにより公開性が図られつつある。また、嬉野市教育委員会のホームページにより、定例教育委員会開催についてのお知らせを行った。	・定例教育委員会の開催場所を塩田庁舎や学校のみでなく、さまざまな公共的な場所を活用して実施することも課題である。また、委員会終了後の意見や感想を聞く会を充実させるための方法の工夫が課題である。	・移動教育委員会会議の傍聴者の幅を、学校の教諭や事務主任、学校用務員等まで拡大したい。また、今後は定例教育委員会会議の議事録の公開をホームページで実施する。
	(4)教育委員に対する多様な教育情報の提供		・学校教育課、教育総務課に関わる情報を教育委員に年間を通して適宜適切に提供する。	・全教育委員に多様な教育関係情報を提供するとともに、学校現場でのさまざまな諸問題について、文章や電話、新聞記事等を利用して随時行った。また、緊急を要する場合には、各委員の自宅を訪問し、情報の提供を行うとともに、内諾を得た。	・緊急に対応が迫られる事件が発生した場合、その事件への対応と教育委員への対応をいかにスムーズに行っていくか課題である。	・報告内容の質、量等について協議し対応マニュアルを作成する。
	(5)教育委員としての役割		・教育行政施策における問題点や課題を指摘し、自己の考え方や意見・思いを述べ、教育委員としての役割を果たす。	・毎月の定例教育委員会会議では、資料の事前配布を行い、各教育委員が熟読し、自己研修に努め、教育施策全般についての問題や課題について指摘し、自己の考え方や思いを積極的に発言し、その役割を果たしている。	・教育委員会を代表してのさまざまな会議に出席した際は、市教委としての考え方等を事前に協議して、それを根拠にして発言し、また、その会議の終了には、全教育委員に報告を確実に行う。	・教育委員としての専門性の構築を図りたい。また、教育委員会研究会等に出席して「教育委員の役割」について研修もさらに深めたい。
	(6)研修会等への積極的な参加		・研修会等への参加をとおして、新教育課題について把握し、教育委員としての専門性の構築を図り、資質と能力向上に努める。	・県教委主催「市町教育委員会研修会」に参加し、研修した。 ・市町村教育委員会研究協議会（第２ブロック）は奈良市により開催され全員参加した。 ・本市の「ろく・さんプラン推進事業」の３ブロック研修会に参加し、各学校の教育課題等について研修した。	・今後も、全国規模で開催される研修会等への参加が課題である。 ・他地教委との交流を図り、本市教育の課題を把握することも必要である。	・各種の研修会等に参加できる財政面の措置の整備を今後とも行う。
	(7)事務局職員の教育施策の企画と立案力の育成		・嬉野市副読本「生きる力の教科書」（改訂版）を活用しその効果検証に努める。さらに、嬉野市民向けのＰＲについても取り組む。 ・嬉野市「子ども学校塾事業」の定着を図る。効果検証に努める。	・嬉野市副読本「生きる力の教科書」改訂版を活用し、小学６年生から中学生までの４年間で活用することで、生きる力の高揚を図る。 ・嬉野市子ども学校塾事業については、２年目に入り、円滑な運用がなされている。参加した児童は、楽しく真剣に宿題をしている。	・嬉野市副読本「生きる力の教科書」の活用により、生徒の不安をやわらげることができるかが課題であり、アンケートを実施して、その状況を把握する必要がある。 ・塾に参加する児童の参加率が学校により差がみられるのが課題である。	・副読本の活用の実施状況を明確に把握する必要がある。また、生徒の不安解消の度合いの状況を、数値的な視点で把握したい。 ・年度初めから塾についての広報を十分に行うようにする。また、入学式などの時間を利用してPRにつとめる。

評価委員からの指摘事項･意見	評価結果（　段階）

指摘を受けての改善点

評価4段階		
	A	達成（80%以上）
	B	ほぼ達成（51～79%）
	C	やや不十分(50～21%)
	D	不十分(20%以下)